

2008 年度 立命館学校教育研究会 総会・分科会

<目次>

オープニング企画

立命館学校教育研究会総会

- ・ 2008 年度 年間活動報告
- ・ 2009 年度 年間活動計画

立命館学校教育研究会分科会

- ・ 第 1 分科会
- ・ 第 2 分科会
- ・ 第 3 分科会



2008 年 12 月 14 日（日）に、120 名を超える校友教員や教育関係の方々にご参加頂き、2008 年度立命館学校教育研究会総会・分科会を開催致しました。今回は、当日の様様をお伝えいたします。

2008 年 12 月 14 日（日）に、120 名を超える校友教員や教育関係の方々にご参加頂き、2008 年度立命館学校教育研究会総会・分科会を開催致しました。今回は、当日の様様をお

伝えいたします。

オープニング企画 オープニング企画として、文学部を中心とした教職課程を履修中の学生8組による、ポスターセッションを行いました。多くの方に熱意溢れる学生の発表に耳を傾けて頂き、ご助言ご指導を頂きました。学生の発表テーマは次の通りでした。

- ・ ALT を生かす理想的な team-teaching とはー公立中学校を対象にー
- ・ PISA から学ぶフィンランド教育
- ・ 日本におけるニューカマー問題
- ・ 高校におけるニューカマー問題
- ・ 知識活用型学力を育成する社会系授業ー 高校 地・歴・公の授業開発 ー
- ・ モンスター・ペアレント
- ・ 貧困・労働問題と教育
- ・ フリースクールー不登校問題を考える

立命館学校教育研究会総会 14 時より立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルームにおいて、2008 年度の総会を開催いたしました。以下、総会の様子をお伝えします。

立命館学校教育研究会運営委員の角田将士准教授の司会により、2008 年度総会が始まりました。最初に、立命館学校教育研究会会長の崎野隆教授より挨拶が行われ、引き続いて、運営委員の長野光孝衣笠教職支援センター主任より、2008 年度の活動報告が行なわれました。崎野会長より、2009 年度の運営委員の提案があり、満場一致の拍手をもって承認されました。次に、2009 年度の活動計画が、運営委員の入江嘉明 BKC 教職支援センター主任より提案され、総会出席者の拍手をもって確認されました。最後に、立命館大学の教職教育の現状について、立命館大学教職教育推進機構事務局長の勝村誠教授より報告があり、閉会の運びとなりました。

★ 2008 年度 立命館学校教育研究会年間活動報告 ★ 1. 2008 年度の活動方針

- (1) 卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。
- (2) 教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
- (3) 学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
- (4) 電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
- (5) その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

2. 年間活動報告について

全体の活動内容

4月 運営委員会

5月

6月 メールマガジン発行

RITSUMEIKAN TEACHERS FESTA 2008

(立命館学校教育研究会 講演会開催)

7月 運営委員会

8月 若手教員研究会

9月

10月 運営委員会

11月 メールマガジン発行

12月 総会・研究会(分科会)

採用試験合格者懇談会 運営委員会

1月

2月 メールマガジン発行

3月

1) 講演会について

日時：2008年6月22日(日)15時～17時 (懇親会：17時30分～)

会場：立命館大学 衣笠キャンパス 創思館 カンファレンスルーム

講師：西岡 加名恵氏(京都大学大学院 教育学研究科准教授)

演題：「活用する力」をはぐくむ教育評価のあり方ーパフォーマンス課題とポートフォリオ評価法を中心にー

参加者数：100名

新しい学習指導要領においては、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等が重視されており、そのような「活用する力」をはぐくむ上で役立つ教育評価の方法として、西岡先生にパフォーマンス課題やポートフォリオ評価方法等についてご講演頂きました。

講演会後の質疑応答でも、活発な意見交換が行なわれ、参加された方々から、有意義な講演会であったとの感想が寄せられました。

2) 若手教員懇談会

日時：2008年8月3日(日)13時～17時

会場：立命館大学 朱雀キャンパス 1階 多目的室

参加者数：45名

各校種から5名の方に実践報告をして頂きました。その後、校種別の分科会を開催し、現場で取り組まれている教育実践やいじめを含む諸問題について意見交換や報告等が行なわれました。活気に満ちた懇談会となりました。

3. 学校教育研究会の会員登録について

2008年12月12日現在、949名の方に会員登録を頂いています。

★ 2009年度 立命館学校教育研究会年間活動計画

★ 1. 2009年度の活動方針

- (1) 卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを行ないます。
- (2) 教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
- (3) 学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
- (4) 電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
- (5) その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

2. 年間活動計画について (予定含む)

全体の活動内容 運営委員会開催

- | | |
|-----|--|
| 4月 | 運営委員会 |
| 5月 | メールマガジン発行 |
| 6月 | 教員採用試験受験者と卒業生教員との懇談会
講演会開催
運営委員会 |
| 7月 | |
| 8月 | 若手教員研究会
メールマガジン発行 |
| 9月 | |
| 10月 | 運営委員会 |
| 11月 | 総会・研究会(分科会)
メールマガジン発行 運営委員会 |
| 12月 | 採用試験合格者懇談会 |
| 1月 | |
| 2月 | メールマガジン発行 |
| 3月 | |

3. 学校教育研究会のホームページの運用について

- (1) 講演会および各種イベントのご案内をさせていただきます。
- (2) 会員の皆様方に、情報交換や交流をして頂ける場として運営させていただきます。
- (3) 教職教育に関わる情報提供を随時させていただきます。

< 2009 年度 立命館学校教育研究会 運営委員 (敬称略) >

会 長	崎野 隆	立命館大学教職支援センター	センター長
		立命館大学教職教育推進機構	副機構長
副会長	七里 源一	滋賀県教育委員会	
副会長	井上 政嗣	雲雀丘学園小学校	教諭
運営委員	村上 晃美	羽曳野市教育委員会	教育委員
運営委員	西山 隆史	京都市教育委員会	参与
運営委員	岡本 真一	神戸市立須磨高等学校	教頭
運営委員	近松 浩平	京都市立桂東小学校	教諭
運営委員	築山 佳苗	岸和田市立山滝中学校	教諭
運営委員	木本 正彦	立命館中学校高等学校	教頭
運営委員	勝村 誠	立命館大学教学部	副部長
		立命館大学教職教育推進機構	事務局長
		(立命館大学政策科学部 教授)	
運営委員	角田 将士	立命館大学教職課程教室	
		(立命館大学産業社会学部 准教授)	
運営委員	長野 光孝	立命館大学教職支援センター (衣笠)	主任
運営委員	入江 嘉明	立命館大学教職支援センター (BKC)	主任
運営委員	田中 康雄	立命館大学教学部	次長
運営委員	植木 泰江	立命館大学教職教育課	課長
事務局		立命館大学教職教育課	

※2009年度から、2ヶ年の運営委員となります。

※立命館大学より選出されている運営委員については、人事異動により任期内であっても交代することがあります。

【立命館大学の教職教育の現状について】～勝村教授の報告より抜粋～

本日までご出席の皆様をはじめとする各関係の皆様には、教育実習 700 名、学校インターンシップ 90 名、学校ボランティア 200 名と、非常に多くの学生を受け入れて頂き、ご指導ご援助を頂いておりますことをお礼申し上げます。

立命館大学は、総合大学としての教員養成の特徴を活かし、それぞれの所属学部教学に基礎をおく高い専門性と幅広い教養や体験を持ち、教職に対する強い熱意と使命感のゆえに教職を職業選択する、そのような人材を育てたい、と考えます。

さらに、地球市民として、「平和と民主主義」を教学理念とする立命館で培った精神を発揮し、子ども達に、学力だけではない、真の「生きる力」を伝え与えることのできる人材を育てたい、そのような思いをもって、教職教育の課題推進に取り組んでおります。

現在、4,000名を超える学生が教職課程を履修しており、ここ10年で1,500名を超える教員を輩出してまいりました。12月現在の2009年度任用の教員採用試験結果は、現役・既卒を併せ延べ254名が判明しています。

また、2007年4月に開設しました「産業社会学部現代社会学科子ども社会専攻」は2年目に入り、小学校教員を目指す優秀な学生たちが集い、これまでの中等教員養成課程に加え、初等教員養成としての厚みを増し、本学の教員養成はさらなる飛躍を目指すところです。そして、2008年4月に設置された、京都の国立・私立8大学連携による「京都教育大学大学院 連合教職実践研究科」に本学も積極的に参画し、本学出身の優秀な学生8名が実践研究を積み、連合の中でも大きな存在感を示しております。教職教育の新たな展開が教育界にとどまらず、幅広く社会の注目を集めております。これもひとえに皆様方からの日ごろのご厚情、ご支援の賜物と深く感謝し申し上げる次第です。

★立命館学校教育研究会 分科会

★立命館学校教育研究会総会後に、分科会を開催致しました。

3つの分科会の内容をご紹介します。

<第1分科会> これからの授業づくりに求められるもの—国・社・英—それぞれの立場から— 報告者：国語：伊藤 隆司氏（立命館大学産業社会学部教授）

社会：古川 悠 さん（立命館大学産業社会学部3回生）

英語：湯川 笑子氏（立命館大学文学部教授）

司会：運営委員 角田 将士

記録：運営委員 長野 光孝

（参加者 約70名／小・中・高校教員、大学生・院生、大学教員、行政、時事通信記者など）

■報告一：社会科授業における「伝統と文化」の教材化に関する研究—中学校の歴史的分野を事例とした教育内容開発—

報告者 古川悠（立命館大学産業社会学部3回生）

60年ぶりに改正された教育基本法、10年ぶり改訂の学習指導要領では「伝統と文化」が重視されている。新指導要領により、中学校社会科歴史分野「伝統・文化」授業を(1)～(3)の類型に分け、開発した学習指導案による授業を実践した。

・類型

- (1)受容学習：伝統・文化を誇るべきものとして扱い愛国心を育む。
- (2)批判的受容学習：伝統・文化のマイナス影響にも焦点をあて総合的に批判的に扱う。
- (3)批判学習：伝統・文化について質の高いメタ認識を育成する観点を重視して扱う。

▼(3)の立場に立って開発した学習指導案による授業展開例

- ・導入：「伝統」「文化」について身の回りの事物を、確認する。（ワークシート等）
- ・展開1：「陵墓」は、伝統的・文化的なものとして教材化されているが、天皇家の力が衰えていた中世・近世は荒廃していた。明治以降、国家によって整備・管理されるようになったもので、「文化財」と断定できない「陵墓」も多いことを理解する。
- ・展開2：日本的な「伝統・文化」は祇園祭など「和文化」中心で、例えばアイヌの「イヨマンテ」はアイヌの最も重要な文化であるが、平成9年「アイヌ文化振興法」が制定されるまで日本の「伝統・文化」として扱われなかったことを知る。
- ・終結：時代の権力によって「創り出された価値観」による「伝統・文化」もあることを知って、長い歴史の中で民衆に愛され保存され受け継がれた真の文化財や伝統・文化的行事の意義を理解する。

■ 報告二：論理的表現力を育てる「書くこと」の授業

報告者 伊藤隆司（立命館大学産業社会学部教授）

大学の授業で、ルポルタージュの執筆に取り組んでいる。前任大学で、「三重のお宝探し」というテーマで実践した。「現代人にとって本当に必要なものは何か」という「問い」に、「お宝」の探求を通じて論理的に自分の考えを入れて答えるのが、授業のネライである。数人のチームで取材と考察をくりかえし、レポートにまとめさせた。予想通り、学生たちは、ルポにまとめるのに手間取り、苦闘した。彼らは、小・中学・高校時代の国語教育の中で、書くスキルは学んでも、説明文に必要な取材の理解やルポの論理的表現力を身につけられていないからである。

それはなぜか。

改訂された学習指導要領では、「課題を見つけ、材料を集め、自分の考えをまとめること」(中学一年)「情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること」(高校「国語表現1」)等、高度情報化などの時代的要請に対応できる資質として、取材能力や論理的表現力の必要性を強調し、教科書の説明文や、書き方などの教材でインタビューの仕方やメモのとり方・使い方のスキルで、「効果的」で「論理的」な表現能力を鍛えるとしている。しかし、教科書教材のスキルなど操作主義的な学習では「論理的」表現力は身につかない。学校現場では、今、学習指導要領の操作主義的学習観を克服し、「自分の考え」「自分の意見」を練り上げる観点、「論理の軸」を構築するプランが求められている。説明文やルポの取材は、「誰のために調べるのか」「何をこそ聞き出すのか」という、根本的な視点を大切に実践する「取材論」がなければならない。

■ 報告三：新学習指導要領と今後の英語教育

報告者 湯川笑子 (立命館大学文学部教授)

(1)小学校英語の指導内容と教授法の整備・支援

- ・小学校5・6年で年間35時間、「外国語活動」として新規に位置づけられた。
- ・教員研修：「中核教員」を設定、5日間25時間研修。全教員に対して中核教員が30時間の校内研修で実施。英語の教員研修の支援体制確立が課題。(韓国では1997年英語必修化の時、120時間の義務研修とした。)
- ・学習指導要領の「ねらい」と日々の指導の際の到達目標設定。
- ・小学校英語の今後の課題～体験目標と到達目標の設定。教授法と教材の精選。

(2)小学校英語の成果を中学校英語に生かす指導方法の確立とカリキュラムのすりあわせ

- ・中学入学時に、小学校で身につけた英語に関する知識
- ・技能を的確に把握し中学校英語教育に積み上げること。(中学校では週3時間が4時間に、指導語彙は1200語に増やされた。)
- ・中学校での語彙・文法の導入時・読み書き指導時に小学校での既知識を活用すること。

■ 研究・討論

- ・社会科の実践は学生の実践であるが、新学習指導要領を理解し生徒の思考プロセスをふまえながら認識を高めようとする意欲的な試みである。
- ・国語教育で、論理的表現力や思考力を育てるため「取材」の意義を明らかにししながら実践を積むことが大切だが、基礎・基本のスキルはどの教材でも大切にすることが必要なのではないか。
- ・小・中・高・大学を見通して、さらに他教科、領域ともつながりながら教育の改善について考え、協力していくこの研究会はたいへん貴重な場である。研究会の充実のため、大学の

教員・OB教員・学生の協力体制を確立しよう。

<第2分科会>テーマ：サイエンスの力が伸びるときー授業実践報告をふまえてー

報告者：日高 俊行氏（立命館守山中学校高等学校 教諭）

司会：運営委員 木本 正彦

記録：運営委員 築山 佳苗，運営委員 入江 嘉明

（参加者 約30名）

■報告

・「中・高校生の理数離れ」と言われるが、理数離れはしていない。本来生徒は理科が好きだ。例えば学習内容は高校であっても、中学生でも興味をもつ。生徒と教師でつくる授業が必要である。

・理科離れの原因は、

(1)子ども達の遊びの低下が原因であり、小学校の時に経験することの不足していることにある。つまり原因を考えて生活の中から学ぶことが少なくなった。また親から学ぶことも不足している。

(2)学校においては、原理やスキルについての指導に重点が置かれており、教師は失敗しながら教材をつくる授業が必要ではないか。そのことが理由で、子ども達に発見することや興味が育っていないのではないか。

・子ども達の理科離れの回復の手立てのためには、見方を変える必要がある。そこで5つのステップと取り組みのポイントを考えた。

第1ステップ…小学校低学年では、子ども達への共感が大切。授業では実物に触れて発見させる。

第2ステップ…小学校高学年では、道具をどのタイミングで与えるかが重要。ここでの発見がその後に大きくつながることもある。

第3ステップ…中学1・2年生では、授業が命である。間違いを否定せず、自信をつけさせる。調査学習も有効である。

第4ステップ…中学3年生は、原理を知りたくなる。教師は難しいことをいかに易しく教えるかにつける。理科であれば、実験をタイムリーに実施する。

第5ステップ…高校生では、「好き」、「興味がある」というのが強い。ここまでに「発見力」を鍛えるのが望ましい。

■研究協議

・参加者から、理科離れの原因についての報告内容に共感する意見が続いた。さらに、教師自身も理科離れになっていないか、理科の教師自身が理科好きであることの必要性の意見

があった。

- ・小学校低学年の生活科の中における「サイエンスの力」の育成についての意見が出た。

意見交換を通して、生活科は系統性よりも、身の回りのもの、経験・体験の中に理科や社会その他の要素があり、子ども達に経験させる内容・方法の工夫が必要であるとの意見に集約された。

- ・子ども達に刺激的な教材を見せてやるのが興味関心の育成に効果的である、との意見と関わって、化学の分野をどのように工夫するか、算数・数学における工夫、科学技術の進展に伴う子ども達の興味関心の変化をいかに踏まえた授業を行うか、という提起があった。

・それに対して、生徒が感動する対象は変化しているが、小学生は今でもかつてと変わらず共感すること、作業による感動、達成感動があれば伸びていくことが、報告者から述べられた。

・参加の学生から、自分の生徒時代に習った経験から、教師の人柄や指導、教育実践に課題があることが提起された。

最後に、サイエンスの力を伸ばすには、学習に対する興味・関心という情意面の評価の工夫や、理系のビジョンの明確化、理系の素晴らしい仕事の内容を子ども達に周知することの必要性が提起され、分科会の協議を終えた。短時間であったが、内容の濃い分科会であった。

<第3分科会>

テーマ：外国人生徒に対する教科指導の実践と課題

報告者：榎木 一彦氏（神戸市立神戸生田中学校 教諭）

司会：運営委員 岡本 真一

記録：運営委員 井上 政嗣

（参加者 約 20 名）

■報告

テーマは『出会い』。「出会いが大事だと思う。」学生時、勉強が手に着かなくなり、「自分が教師になっていいのか？」という疑問を持ったとき、ある先生が「どんなやつが教師になってもええねん。いろんな教師がいるからおもしろいねん。」と言ってくれた…。

現在の勤務校である、生田中学校。そこは、校区内に県庁、市役所、異人館などがある。南京町もあり、中国人生徒が多い。外国人生徒は、学校でしか使わない言葉としての学習日本語（学習言語）につまずいている。そこで、生田中と神戸大が連携して、JSL (Japanese Second Language) 教室を誕生させ、学校の中に日本語教室ができた。指導歴10年以上である日本語指導者が放課後に教えに来てくれる。母国が英語圏でない生徒が英語を学習するのは難しい。「外国で外国語を勉強している。」という状況だからだ。彼らにとって難解な

授業の一位は「社会科」である。学習言語だらけであるため、古い歴史や地理関係は分からない。

日本語教員と同校の教員との連携が大切だと感じる。教科書は「みんなの日本語」を使っているが、自分の年齢相応のテキストが必要である。日本語教員は、担任よりも外国人生徒に精通しており、中学校教員との合同研修会をして、日常的に情報交換を行っている。中学校の教室を使っているからこそ、連携が活かされるし、生徒が中学校を勉強する場所として捉えられる。日本語入門クラスでは、授業の初めにひらがな、カタカナのテストをする。非漢字圏の生徒は漢字が分からない。「百字の限界」と言われる。

外国人生徒にも分かる授業（一斉授業）として次の4点に気をつけている。

- (1) ゆっくり、はっきり、やさしい表現・短い文で話す。
- (2) 目で見せる工夫を多くする（指示も板書）。
- (3) 板書の漢字にルビ打ちをする。
- (4) 教科書中心の指導展開と教科の音読を取り入れる。

編入時の学齢の問題としては、例えば、中学3年であるのに中学1年に入ると、集団作りに問題が起こる。「僕は運ばれてきた。」と話し、母国に思いを引きずっている場合もある。教師が「あなたは、ここ日本でがんばるんだぞ！」というメッセージを伝えることが大事である。このほかにも、小学校時に転校し、国をまたぐと言語を両方しゃべれそうでどちらも分かっていない状態になることがある。「セミ・リングル」「ダブル・リミテッド」についての話もあった。質疑応答の時間には、たくさんの質問があり、母語の尊重、親の理解を得ることや生徒自身を認めてやることが大事であることなどが話された。

分科会の報告は以上です。

2009年度も、講演会や分科会等の様々な企画を予定しております。併せて、電子媒体を中心として、メールマガジンを発行致します。本会ホームページ上での交流もあわせ、皆様のご参加、ご協力をよろしくお願い致します。

次回号では、2009年6月に開催予定の講演会のご案内を致します。